

令和元年5月24日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02636

研究課題名(和文) グループ練習活動を取り入れた漢字授業のデザインと教材開発

研究課題名(英文) Instructional Design and Development of Learning Materials for Group Work Activities in a Kanji Class

研究代表者

濱田 美和 (HAMADA, Miwa)

富山大学・国際機構・教授

研究者番号：20283054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：中・上級レベルの日本語学習者向け漢字クラスにおいて、学習者同士で行うグループ練習活動を取り入れている。グループ練習用教材を改良するため、(1)練習タイプによって学習者のやり取りに違いがあるか、(2)どのような練習が学習者からの評価が高いか、(3)タブレット端末とワークシートとカードの3つの教材ツールをどのように組み合わせるのが効果的かを調べた。さらに、教材で扱う漢字語について、(4)読みの難易度別、(5)日本語と中国語、日本語と韓国語との意味的対応関係を調べたリストを作成した。そして、これらをもとにグループ練習用教材(中級レベル12教材、上級レベル11教材)を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学習者に対する漢字教育にかかわる研究は多く行われ、導入用としてすぐれた教材が開発されているが、その多くは教室で教師の指導のもとで行う教材、あるいは、学習者が1人で学習を進めていけるという教材である。これに対して、本研究で開発した教材は、導入用ではなく、導入後の練習に重きを置くものであり、さらに、教師がそばについていなくても、学習者のみによるグループ練習を通して、漢字の習得を進められるという点が、これまでの一般的な漢字教材とは異なる大きな特徴である。

研究成果の概要(英文)：In an intermediate and an advanced level kanji class for Japanese language learners, we incorporate group work activities conducted by the learners. Aiming to improve the learning materials for group work activities, this study examined (1) is there a difference in the interaction between learners depending on the practice type? (2) which practices are highly rated by the learners? (3) what is the best combination of the three material tools used: tablets, worksheets and cards? In addition, this study made kanji words lists for the learning materials: (4) lists of kanji by difficulty level for reading, (5) lists of semantic correspondence between Japanese and Chinese/Korean. Based on these we developed the learning materials for group work activities: 12 for the intermediate level and 11 for the advanced level.

研究分野：日本語教育

キーワード：漢字教育 語彙教育 日本語学習者 グループ練習 教材開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

コース運営の効率化などの理由により、複数レベルの学習者が1クラスに混在するという状況は珍しくない。特に漢字クラスは、漢字圏と非漢字圏出身者間における漢字の知識量の違いや、漢字の指導は語彙・文法等の指導に比べて各教育機関やコースでの違いが大きく、学習者間の習熟度の開きが大きくなる傾向がある。そのため、1つのクラスで複数の教科書を使って授業をしなければならない場合もある。

筆者の勤務校で開講する漢字クラスにおいても、受講者の習熟度の開きが大きい場合、使用教科書別に学習者を3グループに分け、各グループに対して、30分教師主導の指導を行い、あとの1時間は学習者が1人で練習問題を解くという複式で授業を行うといった対応をしてきた。しかし、30分では十分な指導が行えない、また、1人ではうまく練習できない学習者がいるなどの問題があった。これらを改善するための試みの1つとして、教師がそばについていなくても、学習者同士でグループ練習ができるようなタスクの開発に、2008年度に着手した。

そして、2009年度から開発したタスクを実際に教室で使用したところ、グループの学習者同士で協力し合い、楽しそうにタスクに取り組んでいる様子が見られた。さらに、学期末に学習者を対象に行ったアンケート調査では、グループ練習に対する肯定的な意見が多く見られた。

そこで、本格的にグループ練習を漢字クラスの活動に取り入れることにし、練習内容および教材の改良に取り組むことにした。グループ練習をより充実させるためには、グループ活動を活性化させるために必要な要素は何か、個々のタスクがどのような点で漢字学習に効果をもたらしているのか、また、授業内容に応じてどのようにタスクを使い分けるのが効果的なのか、これらの検討が必要だと考え、本研究課題に取り組むことにした。

2. 研究の目的

本研究の最終目標は、学習者同士でグループ練習を効果的に行えるような、漢字学習教材を開発することである。受講者の習得状況の開きが大きく、複式で授業を行っている漢字クラスにおいて、学習者個人あるいは学習者同士で行える様々な教材の作成をこれまでに試みてきた。本研究課題では、この中のグループ練習用の教材に焦点を当て、学習者相互の交渉の様子、および、学習者1人1人の習得状況を観察することによって、グループ練習活動を活性化させるために必要な要素は何か、そして、グループ練習を行うことでどのような学習効果があるのかを明らかにしたい。そしてこの結果をもとに、より効果的なグループ練習活動を行えるような教材の開発へとつなげたい。

グループ練習では漢字・漢字語の字形、読み、意味、用法、語構成にかかわる練習を扱っている。本研究期間内では、特に漢字・漢字語の読みに注目し、グループ練習の中で習得可能な学習項目と習得困難な学習項目に分別する。あわせて、グループ練習教材にはタブレット端末、ワークシート、カードを使用しているが、練習内容に応じて各ツールをどのように組み合わせるのが適切かを検討する。そして、これらの結果をもとに、より効果的なグループ練習を行えるような教材を開発する。

3. 研究の方法

先行研究(高畠・濱田:2010)で作成したグループ練習用を整理すると、まず、グループ内での活動のタイプから見た場合、大きく「ほかの学習者と協力して課題を達成するタスク」と「ほかの学習者との情報差を利用して課題を達成するタスク」の2種類に分けられる。次に、タスクで扱う内容から見た場合は「漢字そのものにかかわる情報(字形、読み、意味)に留意させるタスク」と「漢字語にかかわる情報(読み、意味、語構成、品詞)に留意させるタスク」と「漢字や漢字語の使い方に留意させるタスク」に分類される。そこで、先行研究で作成したタスクを用いて、グループ練習時の学習者間のやり取りを記録【調査1】し、タイプ別に分析する。あわせて、グループ練習後の学習者からの評価(アンケート調査【調査2】)、習得状況を測るテスト【調査3】の結果をもとにして、本教材の学習効果を測定する。

また、中国語と韓国語の知識を有する学習者にとって、同形の日本語の漢字語は一般的に習得しやすいと考えられるが、同形であっても意味が異なる語があり、さらに意味のずれに気づきにくい語もある。これら指導上留意が必要な語を明らかにするため、教材で扱う漢字語について日本語と中国語、日本語と韓国語との対応関係を整理する【調査4・5】。

< 本研究で行う調査 >

調査1: グループ練習活動時の学習者相互のやり取りを記録(音声・映像)する。

調査2: グループ練習に参加した学習者に対し、練習活動に関するアンケート調査を行う。

調査3: グループ練習で扱った漢字・漢字語の習得状況を測るためのテストを実施する。

調査4: 教材で扱う漢字語について、中国語における同形語との意味的対応関係を調べる。

調査5: 教材で扱う漢字語について、韓国語における同形語との意味的対応関係を調べる。

4. 研究成果

- (1) グループ練習は大きく、学習者の1人が出題して他の学習者が答える「出題解答型」(ほかの学習者との情報差を利用して課題を達成するタスク)と、学習者同士で相談・協力しな

から答えを考える「協力解答型」(ほかの学習者と協力して課題を達成するタスク)とに分けられる。この2タイプにおいて、学習者のやりとりによどのような違いが見られるかを観察した。その結果、いずれも学習者の1人が学習課の漢字・漢字語の読みにかかわる【出題】【解答】を行った後で、他の学習者もその発話を【反復】するといった形で練習を進めていることが多かった。一方、両者の違いとしては、出題解答型では出題者が答えを知っているため、学習者の漢字・漢字語の習熟度にさほど影響されずに練習を進められていたのに対して、協力解答型では漢字学習が不得手な学習者らのグループでは答えるのに時間がかかり、練習中の発話機会も減ってしまっていた。協力解答型では学習者の習熟度に合わせた練習内容の工夫がより強く求められることがわかった。(5. 主な発表論文)

- (2) グループ練習に参加した学習者、中級クラス29人、上級クラス19人、計48人に授業最終日にアンケート調査を行った結果、次のことがわかった。

グループ練習のおもしろさと有用性については肯定的な回答が大半を占めた。練習時間(10~20分)は適切という回答が多かったが、短すぎたという回答もあった。練習方法についてはわかりやすかったと回答した学習者が多かったが、上級クラスではわかりにくかったという回答もあった。学習者から評価が高かった練習は、漢字語の読みを確認する、漢字を組み合わせる漢字語を作る、タブレット表示のヒントをもとに漢字語を選ぶ、例文中に入る漢字語を選ぶ、メンバーが読むヒントをもとに漢字語を選ぶ、だった。漢字の読みの確認練習は中級クラスでの評価が高かった。学習者から評価が低かった練習は、メンバーが読むヒントをもとに漢字語を選ぶ、メンバーが読む漢字語や文を聞き取る、漢字語や文を読んでメンバーに聞いてもらう、だった。メンバーの声の聞き取りにくさや発音の不正確さ、また中級クラスでは漢字語を聞く練習自体の難しさが理由として考えられる。

グループ練習の効果については、漢字・漢字語に触れる回数が増えて覚えやすくなったという回答が多かった。楽しく勉強できたという回答した学習者も半数近くいた。上級クラスでは、メンバーに説明することで覚えられたと回答した学習者も半数近くいた。グループ練習のメンバーについては、練習しやすい相手だったと回答した学習者が多かったが、練習しにくい相手だったと回答した学習者もいた。中級クラスと上級クラスを比べると、上級クラスのほうがメンバーへの満足度が低い学習者が多かった。その理由として、学習者間の漢字・漢字語の習熟度の開きが考えられる。

グループ練習後のメンバーとの関係性について、前より仲良くなった、話すようになったと回答した学習者が特に上級クラスで多かった。

以上をまとめると、漢字クラスにグループ練習を取り入れる試みは、漢字・漢字語に触れ覚えやすくなることや、学習者同士で楽しく学べるなど、学習者から肯定的に評価されていると言えるだろう。ただし、グループ練習の方法や練習内容については改善の必要性が認められた。学習者個人の漢字・漢字語の習熟度、並びに、グループ構成員間の習熟度の開きへの対応がより必要であることが窺われた。(5. 主な発表論文)

- (3) グループ練習は、中・上級レベルの日本語学習者を対象に、『INTERMEDIATE KANJI BOOK 漢字1000PLUS』Vol.1、Vol.2(凡人社)を教科書として用いた漢字クラスにおいて、教師主導による導入・練習後のまとめ練習として毎回の教室活動の最後に行っている。この漢字クラスの授業後に実施した漢字語の読みテストの結果をもとに、テストで取り上げた282語の漢字語について正答率を求め、正答率をもとに難易度順に配列したリストを作成した。次に、各語の誤答を整理し、学習者3人以上に見られた読み誤りを高頻度の誤りとして抽出し、リストに加えた。282語の正答率別分布は、正答率60%未満の語が2割、60%以上80%未満が3割、80%以上の語が5割で、全体的に正答率の高い語が多かった。また、正答率の低い語を中心に抽出された高頻度の誤りには、当該漢字の有する他の読みを書いた誤りが特に多い、長音・短音、清音・濁音といった類似の他の音を書いた誤りが多い、和語動詞と和語形容詞については無解答、あるいは他の和語動詞や和語形容詞の読みを書いた誤りが多いといった特徴が見られた。(5. 主な発表論文)

- (4) グループ練習用教材は、教師の援助なしで学習者だけで円滑にグループ練習を進めていけるように、ワークシートとカードとタブレット端末、3つのツールを組み合わせることが大きな特徴である。これまでの教材開発の過程の中で、各ツールにはそれぞれ利点と欠点があり、3ツールを適切に組み合わせることで各ツールの欠点を補え、学習者にとってより使いやすい教材作成ができることがわかった。一方で、ツールの多さが学習者の負担になる場合もあることが学習者同士のやり取りの観察により問題点として浮かび上がった。そこで、3ツール全てを用いる練習においては、同時に使用するのは2ツール以内としたところ、円滑に練習が進むようになった。(5. 主な発表論文)

- (5) グループ練習用教材で取り上げた漢字語811語を対象に、中国語(簡体字)との意味的対応関係を調べた。6割(479語)が日中両言語で意味的に対応する漢字語が同じだった。これらは、中国人学習者にとって母語での知識が生かせ、理解しやすい語と言える。ただ、

今回は意味的な面に焦点を当てて整理したが、構成漢字の字形から見ると、日本語の字形とかなり異なるものも多く含まれており、今後、字形の観点からも指導上の留意点を洗い出す必要がある。そして、日中両言語で意味的に対応する漢字語が異なるものは4割(332語)だった。このうち日本語と同一漢字で表される中国語が他にあるものは89語で、中でも特に注意が必要なものが、語が用いられる場面も似ていて、意味的にも近いため、日中両言語での違いに学習者が気づきにくい語である。これら指導上留意すべき語に関する情報を含めた中国語との対応リストを作成した。(5. 主な発表論文)

- (6) グループ練習用教材で取り上げた漢字語 809 語を対象に、韓国語との意味的対応関係を調べて、対応リストを作成した。韓国語の場合は 8 割弱(623 語)が日本語と意味的に対応する漢字語が同じで、(5)で見た中国語の場合よりも韓国語のほうがさらに意味的に対応する語が多いことがわかった。そして、日韓両言語で意味的に対応する漢字語が異なるものの大半は和語で、中国語の場合のように、日本語と同一漢字で表される韓国語が他にない語はなかった。意味的な対応関係から見ると、韓国人学習者は日本語の漢語を学習する際に、中国人学習者よりも母語での知識を利用しやすいと言える。(5. 主な発表論文)
- (7) (1)~(6)の研究結果をもとに教材の改訂を行い、中級レベル 12 教材、上級レベル 11 教材、計 23 のグループ練習教材を開発した。開発教材は Web 上(日本語学習支援サイト RAICHO > 漢字グループ練習用教材 <http://www3.u-toyama.ac.jp/raicho/kanji/>)で公開している。利用者が各自のニーズにあわせてアレンジしやすいように書き込み可能な形式で提供するとともに、教材のダウンロードサイトはスマートフォン対応とし、利用者がアクセスしやすいよう配慮した。

<引用文献>

高畠 智美、濱田 美和、複数レベルの学習者を対象とした漢字クラスの授業改善及び教材開発:学習者の学びの活性化のための試み、富山大学留学生センター紀要、第9号、2010、pp.9-18

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

濱田 美和、漢字教材開発のための基礎資料:中・上級日本語学習者の漢字読みテストにおける誤答、富山大学国際機構紀要、査読無、創刊号、2018、pp.19-33、DOI: 10.15099/00019210

濱田 美和、漢字クラスにおけるグループ練習:グループ練習参加者を対象としたアンケート調査結果、富山大学人間発達科学部紀要、査読無、13巻1号、2018、pp.155-163、DOI: 10.15099/00019169

濱田 美和、韓国人学習者向け漢字教材開発のための基礎資料、富山大学人間発達科学部紀要、査読無、12巻2号、2018、pp.165-176、DOI: 10.15099/00018345

濱田 美和、中国人学習者向け漢字教材開発のための基礎資料、富山大学人間発達科学部紀要、査読無、11巻3号、2017、pp.131-142、DOI: 10.15099/00017460

濱田 美和、高畠 智美、ワークシート、カード、タブレット端末を用いた漢字学習教材の開発:日本語学習者間のグループ練習活性化のために、富山大学国際交流センター紀要、査読無、3号、2016、pp.25-34、DOI: 10.15099/00016710

濱田 美和、漢字クラスにおけるグループ練習:練習タイプの違いに注目して、富山大学国際交流センター紀要、査読無、2号、2015、pp.11-19、DOI: 10.15099/00006092

[学会発表](計1件)

濱田 美和、高畠 智美、漢字クラスにおけるグループ練習用教材:ワークシート、カード、タブレット端末の効果的な活用法、日本語教育国際研究大会、2016

[その他]

ホームページ等

<http://www3.u-toyama.ac.jp/raicho/>

6. 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名:高畠 智美

ローマ字氏名:(TAKABATAKE, Tomomi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。